

## ドランシーの子供たちの声

和 泉 涼 一

### 1 はじめに～マレー地区の浮彫り壁面

2012年の春、学生の研修旅行において、マレー地区からタンブルの塔の跡地まで歩いたことがある。途中、図1の浮彫りを施された外壁をみかけた。赤ん坊を抱えた半裸の女性と、そのまわりにまとわりつく3人の幼児たち。足元からは水が滾々と湧き出ていて、母親は赤ん坊に乳を含ませると同時に左手の器から子供たちに水を飲ませている。作風は擬古典的。いささか場違いの感があり、どういう寓意だろうと思ったが、右側に掛かっていたプレートを読んで納得した。プレートの文言は以下のとおり。(図2)



図1 撮影は著者

De 1942 à 1944, plus de 11000 enfants  
furent déportés de France par les Nazis  
avec la participation active du gouvernement  
français de Vichy et assassinés  
dans les camps de la mort parce que nés juifs  
Plus de 500 de ces enfants vivaient dans le 3<sup>ème</sup>  
Nombre d'entre eux ont fréquenté  
L' école de filles de la rue de Sévigné  
Actuellement atelier des beaux-arts  
De la ville de Paris.  
Le 12 mars 2005    *Ne les oublions jamais*

(1942年から1944年までのあいだに、11,000人以上の子供たちがナチの手によってフランスから移送されました。それにはヴィシーのフランス政府が積極的に関与していたのです。そして子供たちは死の収容所で殺されました。ユダヤ人に生まれたという理由で。

殺された子供たちのうち500人以上はここ第3区に住んでいて、多くはセヴィニエ通りの女子学校に通っていました。その学校がいまのこのパリ市美術工房なの

です。

2005年 3月12日

あの子たちのことを決して忘れないようにしましょう。）

たしかに右手の通用門の上には「パリ市文化局美術工房」という文字がある。マレーは昔からのユダヤ人街なので、このプレートを読めば浮彫りの意味するところもよく理解できる。ただでさえ劣悪な本来家畜用の移送列車は、夏冬には酷暑厳寒により最悪の地獄と化す。とりわけ夏場にはすべての移送者が渴きに苦しんだことが知られており、この彫刻の女性が与える水には幼くして殺されていった無辜の子供たちへの鎮魂の思いが込められているのだろう。



図2 撮影は著者

ルーシー・S・ダビドビッチによれば (p. 605), 大戦勃発直前の在仏ユダヤ人は約35万人であり、そのうち殺害されたのは約9万人であった (諸説あり)。その35万人のうち、同じくダビドビッチによればもとのフランス人は約15万人であったとされるから、約20万人が外国籍もしくは帰化後間もない状態であったと推定される。同書によると、約5万人が独逸およびチェコスロバキアから、約2万5千人がベルギーとオランダから、そして残り2万5千人はその多くが東欧から1920年代および1930年代にフランスに逃げてきた人々であるとされる (p. 250)。1942年7月2日にヴィシー政府はユダヤ人を、フランス国籍を有する者と外国籍の者とに区別し、フランス国籍のユダヤ人を保護し続けることを決定した (p. 254)。このことは言い換えるなら外国籍のユダヤ人はナチスに引き渡される (主としてフランス警察の手によって) ことを意味し、かくして殺害された9万人のユダヤ人の母集団はほぼ外国籍 (および無国籍) のユダヤ人であったことが理解できるのである<sup>(1)</sup>。

1942年7月16日から17日にかけて生じたいわゆるヴェル・ディヴ事件をその悲劇的な象徴とするユダヤ人の逮捕が開始されたのは1941年5月であるが、ユダヤ人をドイツやポーランドなどの収容所に送り出すための中継収容所はフランス各地、とりわけLoiret県に多く置かれた。それらの中継収容所のなかでもDrancyはパリ郊外という官憲側からすれば絶好の立地条件もあってもっとも多くのユダヤ人を送り出す最大の施設となった。たとえばヴェル・ディヴ事件ではドランシーにはじつに約9千人のユダヤ人 (子供は4千人) が収容されたのである。このうちアウシュヴィッツに移送されてなおかつ生還を果たしたのは成人30名のみで、子供は絶無であったという (ダヴィドヴィッチ, p. 254)。また宮川裕章によれば、1942年から1944年までのあいだに強制収容所に移送されたユダヤ人は約7万6千人で、そのうち12歳以下の子供は6千人であった。生還者は5パーセントに満たない。そして移送されたユダヤ人の8割はドランシーを出発地としていた (pp. 85-86)。こ

こから最初の移送列車が出たのは1942年3月であるが、以後、1943年7月から1944年8月までに22,407人のユダヤ人がアウシュヴィッツ・ビルケナウ絶滅収容所に移送され、そのほとんど全員が殺害されたのである。

本来もっとも庇護されて然るべき子供たちがこのような組織的迫害と殺戮の対象となったことは、まさに文明の恥辱といわねばならない。これらの子供たちは当然のことながらこの世に生存した期間があまりにも短く、また親と引き離された状態で殺されるケースがほとんどなので、彼らがたしかにこの世に人間として存在していたという痕跡はともすると忘却の彼方に追いやられ、記憶の闇に葬られてしまいかねない。たとえば2014年のノーベル文学賞を授与されたPatrick Modianoがドイツ占領時代に連れ去られ殺害された人々のことをあれほど執拗にテーマとするのは、まさにこの忘却の彼方から彼らを救おうとする人間的な抗いのゆえなのである<sup>(2)</sup>。そのモディアーノに深刻な衝撃を与えたのが占領時代の歴史研究家でありナチ・ハンターとしても著名なSerge Klarsfeldの畢生の大著『強制収容所移送者記録名簿』であった<sup>(3)</sup>。絶滅収容所に移送された確認される限りのフランスのユダヤ人75,251人について、その氏名や生年月日、出生地、逮捕時の住所、移送列車の番号、移送名簿など、およそ知りうる限りの情報を網羅した驚異的な偉業といつてよい。とりわけその続篇（Fayard版では第4巻）である*Le Mémorial des Enfants Juifs Déportés de France*には移送された子供たちの写真や親に宛てた手紙、生き延びた級友たちの回想なども含まれていて、この巻はそれ自体がひとつの巨大な追悼記念碑と化している。モディアーノは言う。「クラルスフェルトは、この児童の『記録名簿』に一千五百枚の写真を集めているが、彼は一万一千の顔を掲載した一万一千ページの本をつくりたかった、と書いている……。微笑みをたたえた、人を信じきった多くの顔、この微笑みや顔が抹殺されてしまったかと思うと、私たちは生涯にわたって恐ろしい空虚感をおぼえつづけるであろう……。」(p. 183)

本稿ではそれらの子供たちのうち数名を選んで紹介し、戦後の文明社会が抱え込まざるをえなかった記憶の負債がどのようなものであるのかを、あらためて確認する責めを果たしたい。

## 2 ドランシーの子供たち

\*以下は写真を含めてクラルスフェルトの著書からの翻訳紹介である（図13のみ別出典）。ページ数は同書Fayard版による。補足は主としてIzieu記念館の情報を出典とし、該当箇所には下線を付した。人名・地名は有名なものをのぞいて少なくとも初出時は原綴表記とする。

### 1) Hans AMENT. (pp. 444-445.)

1934年2月15日ウィーン（オーストリア）生。Izieu保護施設の〔殺害された〕44人の子供たちのひとり。父親のMaxは第50移送列車（1943年3月4日）で移送。母親のErnestinaは結核のため1943年3月23日にAin県Hautevilleのサナトリウムに入所。同所はHans少年の施設から数十キロメートルの距離にあった。Hansは1943年9月21日にIzieuに到着。1944年4月6日にリヨンの屠殺人と恐れられた親衛隊中尉Klaus Barbieにより一斉逮捕

された。母親は同サナトリウムで1944年8月7日に死去。手紙からわかるようにHansはJeanという名前を使っていた。兄はすでにアメリカ合衆国に移住しており、Hansもまた移住許可を得ていたが果たせず、Drancy中継収容所より第75移送列車（1944年5月30日）で移送、6月4日にアウシュヴィッツで殺害。

（訳者補足。以下は施設よりサナトリウムにいる母親に宛てたHansの手紙である。誤字脱字文法上の間違いなどは適宜修正してある。本来それらの部分も忠実に再現すべきであるが、ここでは内容を伝えることを優先した。）

（頭書部分判読不能）

なつかしいママ

ママの手紙を受け取りました。とてもうれしかった。ありがとう。ママに手紙を書かなかったのはハガキがなかったからです。でもある男の子からハガキをもらいました。こちらではもうほとんど雪はふりません。ママはもう治ったのでしょうか（判読不能）。ぼくはちゃんと食べています。とても元気です。寒いので（判読不能）してね。雪がふったら手紙を書いてください。雪がたくさんつもっていたころはそり遊びをしに斜面に出かけました。とても楽しかった。フレディに伝えてください。ぼくに手紙を書くときはドイツ語はだめだって。（判読不能）学校は家のなかにあります。べつに女の先生がいます。ちゃんと勉強をおしえてくれます。家のそばに農園があります。そこにはイヌが4匹います。ママに1000000000回のキスをするね。ママの息子Jeannotより。いつもママのことを考えています。

ジャノ（署名）。

うらを見てね。

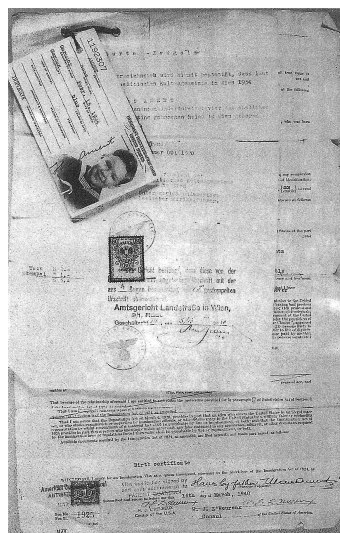


図3 Hans Ament

## 2) Nina ARONOWICZ. (pp. 450-451.)

1932年11月28日ブリュッセル（ベルギー）生。Izieuの44人の子供たちのひとり。父はSzyja-Leib, 母はMieckla。一家でHérault県のPalavas-les-Flotsに避難してきたがヴィシー警察による逮捕が迫っていることを予想し、両親はNinaを非ユダヤ人のフランス人家庭（Regnat家）に預けた。NinaはLunelで庇護される。以下は1944年9月18日（すなわちNinaの逮捕より5か月後）のRegnat氏の手紙。「すぐにNinaの母親も逮捕され、Perpignan近くの収容所に送られました。その後Drancyの収容所から消息がありました、それも途絶えました。父親だけは逮捕を免れました。最後の消息は一年以上も前のことになります。PerpignanのSaint-Louis病院からでした。自由地帯がドイツ軍に占領されてから、わたしたちはNinaを約8か月手元に匿いました。しかしMontpellierの民生委員



Zlatyn夫人に引き渡さなければならなかったのです。1943年春のことでした。Izieuの保護施設から最後の連絡があったのは10か月前です」。Aronowicz家はアメリカ合衆国に移住するはずであった。1941年の末頃、Ninaはすでに大西洋を首尾よく渡ることができたおじ夫婦に手紙を書いている。「おじさまたちがアメリカにいらっしゃることを私たちはとても喜んでいます。私たちもはやくそちらに行きたいものです。アメリカは気に入りましたか？」Regnat家から出たあと、NinaはしばらくCampestreにあったユダヤ人の子供の保護施設にいて、そこから他の子供たちと一緒にIzieuに移動した。1943年7月3日、NinaはIzieuからおばのConstanceに手紙を送る。「ここにいられてとても満足です。美しい山々があり、山の上からはローヌ川の流れを見おろすことができます。とても美

しい眺めです。昨日、みんなでローヌ川に泳ぎに行きました。Marcelleさん（先生です）も一緒です。日曜日には、Pauletteとその他ふたりの小さな子供たちのためにちょっとした誕生パーティを開きました。たくさんお芝居をしたり、とても楽しかったです。それから7月25日にはこの施設のためにまたパーティを開く予定です」。Ninaの母親は1942年9月11日の第31移送列車で、父親は1943年12月7日の第64移送列車でアウシュヴィッツに移送された。Nina自身は1944年4月13日の第71移送列車でDrancyからアウシュヴィッツに移送された。



図4 Nina ARONOWICZ

### 3) Eliane BAER. (pp. 458-459.)

12歳。Chaumont (Haue-Marne県) のPasteur通り9番地で両親および妹3名とともに逮捕。Jacquelineは9歳、Nicoleは6歳、Marieは2歳。全員1944年2月10日の第68移送列車で移送。Baer氏は薬剤師。掲載したElianeの写真は彼女の級友であるMarie-Edmée Benoit夫人による。夫人はElianeの思い出を語ってくれた。

拝啓

わたしの幼馴染み、Eliane Baerの写真をお送りします。彼女はアウシュヴィッツのガス室で殺されました。三人の幼い妹たちも一緒です。1944年2月13日のことでした。彼女は12歳と6か月でした。この写真は1943年10月か11月に撮られたクラスの集合写真から、彼女の部分だけを写真屋さんが切り出してくれたものです。Chaumontのリセの第5学年A1クラスでした。ちょっとつけ足しておく、じつはわたしの息子が写真屋さんの手伝いをしたのです。「自分も参加するために」、だそうです。



図5 Eliane BAER

Elianeのことを話してくれというご依頼でしたね。でも取り立てて話すほどのことはないのです。級友のひとりでそれ以上でも以下でもなく、わたしたちみんなと同じ、だから特別なところもないし、べつに将来有望という感じでもありませんでした。彼女の思い出を飾り立てようとしてありもしない美点をあれこれ挙げるとしたら、わたしは彼女を殺した人たちと同じ側の人間になってしまうような気がします。彼女はただひとりの、掛けがえのない人でした。あなたやわたしと同じように。

いまでも覚えているのは、当時のリセでは英語の教科書がとても不足していたということです。クラスで10冊くらいしかありませんでした。それをみんなで融通しあうのです。わたしはElianeの家に行って一緒に宿題をしたものです。彼女のところには貴重な本がありましたから。そして今でもわたしは彼女と一緒に宿題をしているわけですね。彼女とあなたのために。回想という宿題を……

写真ではElianeは（ユダヤ人の）星をつけています。でもその星が見えるのはわたしだけなのです。星の印はワンピースに縫いつけられていて、そのうえにきつきの袖なしベストを着ていたことをわたしは知っています（あの頃のわたしたちは皆窮屈なニットを着ていましたから）。彼女のお母さんは自分の娘たちが（上のふたりですが）目立つように星をつけて学校に行くのを受け入れませんでした。それで星をワンピースやタブリエに縫いつけて、その上に別の衣服を着て隠すようにしていたのです。コートには星はありませんでした。でもわたしは知っていますが、Elianeの両親は彼女に、もし求められたらちゃんと星を付けていることをみせるように言いつけていました。Elianeのことをひと口で言うなら、生き生きした、明るい、頭のいい子で、少しだけど独立心の強い性格でした。いま思うに、もし生き延びることが出来ていたら、さぞ「個性的な」女性になっていたでしょうね。Elianeの家庭は明るくて温かみがありました。家具調度もモダンで、輝いていましたよ。背の低い小ぶりの家具がありましたが、その家具は扉を開けると内側が照明で明るくなる仕掛けで、とても驚いたことを覚えています。ピアノや楽譜のことも…… Baer夫人は、わたしの記憶するかぎりではとても美しい人でした。音楽家だったと思います。Baerさんは聡明でとても尊敬されていました。ほんとうに心のひろい人で、にぎやかなユーモアの持ち主でした。前にお話したように、Baerさんがアーリヤ系の同業者のことをうちの父に話すときに、市役所広場のあのユダヤ人、なんて言い方をしていました……

Baerさんのお宅へはほんとうに気軽に入っていくことができました。父はいつも、Baerさんのところは「いつでもだれでも大歓迎」のお宅だとわたしに言っていました。教会の首席司祭さんはChaumontの銃殺事件のときに処刑場で被害者たちに寄り添った人ですが、日曜日にはBaerさんのお宅で食事をしていました。

Baerさんは身の危険を全然感じていなかったと思います。最後の数週間はべつかもしれませんが、そうだとしたときにもう手遅れだったでしょう。彼は善良な、疑うことを知らない人でした。Baerさんとその家族のことを心配していたのはむしろほかの人たちでした。一家をスイスへ逃がそうという計画があったことを覚えています。彼は無駄なことだと拒みました。危険が迫っている兆候がわずかにでもあると彼が考えたとしたら、ぜったいに子供たちをそんな危険にさらすことはなかったでしょうね。子供たちこそ彼の人生の中心でしたから。彼のおかげで娘さんたちはしあわせでした。

ある朝、うっかりしてリセに一時間もはやく着いてしまったことがあります。時間割を教えてもらうためにElianeの家に寄って呼び鈴を押しました。Elianeはにこにこしながら内階段を下まで降りてきてくれました。ピンクの部屋着のまま、ぐしゃぐしゃの髪を指で整えながら。奥のほうから妹さんたちの声が聞こえてきました。朝ごはんを食べる子供たちのあの楽しそうな物音も。たぶん、わたしがひとり娘で母親がいらないせいなのかもしれませんが、このささやかな思い出がこれまでずっとわたしの記憶に鮮明に刻み込まれていて、ほかのすべての記憶を圧倒しているのです。

あの家族こそ幸福にふさわしい人たちです。あの幸福があのような恐怖のなかで台無しにされたことを思うと、残念でなりません。

ある日の午後、4時でした。一斉逮捕までひと月足らずだったと思いますが、Elianeがリセから戻らなかったのです。そんなことはそれまで一度もありませんでした。

たちまちご両親は恐怖で狂ったようになって、Elianeのお母さんはあわただしくあちこちに電話をかけました。もちろんうちにも電話がきて、Elianeはわたしと一緒にじゃないかと訊かれました。うちにはいません。彼女を見かけた人はだれもいなかったのです。それから7時になって、Elianeは平然と戻ってきました。自分のせいで両親がどんなに心配したかなど思ってもみないで。あの頃「パーマネント」と呼ばれていたものを自分もやってみようと思いついたとかで、3時間のあいだ美容師さんのところにいたのだそうです。娘が窮地に陥ったと思いこんだお母さんがみせたあのひどい苦しみようを思い出すとき、お母さんの、そして家族の人生の最後の日々が彼女にとってどれほどの苦痛であったかを思わずにいられません。

一斉逮捕の前の火曜日に、「屋外」授業がありました。冬だとそれは街はずれまでの遠足です。帰り道、突然雨が降り出したのですが、Elianeは雨を防ぎようがありません。小柄で痩せていましたから。そこで同級生のひとりでMichèleという大柄な子がコートの裾を広げて彼女を抱えるように入れてやったのです。それでElianeは雨から守られながら帰ることができたのでした。

Elianeがいなくなっただけの日々、Michèleはしょっちゅうわたしたちに言うのです。「火曜日、わたしは彼女をコートで守ってやった……コートで守ってやった……」。どうやらそんなふうに言うことで、無意識的にでしょうが、自分を安心させようとしていたのでしょう。自分を正当化したかったのですね。自分はElianeを守ろうとした、匿おうとした、と。

あなたが刊行されようとしているこの子供たちのアルバムは掛けがえのないものです。Elianeの微笑み、あの人を信頼しきった微笑みは、あなたのおかげで彼女の死後もなお長く生き残っていくことでしょう。そう思うとわたしは幸福な気分になります。ありがとう。

あともうひとつ。わたしの幼馴染みのことを電話で話すとき、あなたはElianeと言いましたね。まるであなたも昔から彼女を知っていたかのように。そして殺されていった無数の子供たちのなかの、ひとりの無名の子供ではないかのように。そのことにわたしは心を動かされました。

## 4) Danièle BAUER. (p. 464.)

1939年3月8日パリ生。両親とともにLimogesに避難する。Petinaud-Beaupeyrat通り38番地。同住所にて1944年2月に逮捕され、1944年3月7日に第69移送列車で移送され、母方の祖父母およびおじとともにガス室で殺害される。Danièleが5歳の誕生日を迎えたのはアウシュヴィッツ行きの移送列車のなかであった。Limogesで逮捕され同じ第69移送列車で移送されたGuy KohenはDanièleが逮捕されたときの状況を以下のように語っている。「2月5日頃に新しい逮捕者たち。Limogesで捕まった3人がわれわれの住居に連行されてきた。父親と息子、それに娘婿。母親と娘も同じように逮捕されていた。これで家族全員だ。ただ4歳になるお転婆の少女だけは建物の門番女に預けられていた。彼らは門番女にこう断言していた。《野蛮



図6 Danièle BAUER

人じゃないんだ。子供まで手にかけることはしないさ》。小さな娘が移送という悪夢から逃れられるよう願う父親は、この台詞をなんど繰り返したことだろう！罪もない何千もの子供たちの殺戮を目撃したわたしの頭を、この台詞がなんどよぎったことだろう！パリへ向かって列車が発発するその朝、警官がわれわれの房に子供を連れてきた。ドイツ警察が門番女のところから引っぱり出したのだ。父親は悲嘆に暮れ、母親は気絶してわれわれが支えねばならなかった。気絶していなければ彼女は壁に頭をぶつけて自殺していたことだろう。こうしたことの一切を語るのはわたしには不可能だ。わたしは涙なくしてこういう残忍な行為に立ち会うことが出来なかった。夕方、3時頃に、われわれはホールに集められた。およそ60名ほどだった。門のところにバスが待っていて、われわれを駅まで運んだ。2月24日のことだ。駅には一台の車輦が止まっていて、そこにわれわれは乗り込んでいった。パリ行きの急行列車が到着するとその最後尾にわれわれの車輦が連結された」。

5) Jacques BENGUIGUI. 1931年4月13日Oran (アルジェリア) 生。1943年8月1日Izieu到着。1944年4月6日に親衛隊中尉Klaus Barbieの指揮するゲシュタポによって一斉逮捕され、4月13日に第71移送列車でDrancyよりアウシュヴィッツへ。

Richard BENGUIGUI. 1937年3月27日Oran (アルジェリア) 生。1943年8月1日Izieu到着。1944年4月6日に親衛隊中尉Klaus Barbieの指揮するゲシュタポによって一斉逮捕され、4月13日に第71移送列車でDrancyよりアウシュヴィッツへ。

Jean-claude BENGUIGUI. (p. 483.)

1938年12月26日Oran生。1943年6月7日にIzieuへ。1944年4月6日に親衛隊中尉Klaus Barbieの指揮するゲシュタポによって一斉逮捕され、4月13日に第71移送列車でDrancyよりアウシュヴィッツへ。母親のFortunée Messaudaは旧姓Chouraki, 1904年4月30日にやはりOranで生まれた。彼女はMarseilleで逮捕され、第58移送列車で1943年7月31日にアウシュヴィッツに移送された。アウシュヴィッツでは10号ブロックでさまざま



な人体実験のモルモットとなった。(中略) 解放後、フランスにもどったFortunéeは3人の息子たち全員がアウシュヴィッツで殺害されたことを知る。生き残ったのは4番目の子供であるYvette BENGUIGUIだけであった。Yvetteは兄たちと同じく1941年3月12日にOranに生まれ、1943年6月7日にIzieu到着。ゲシュタポの一斉逮捕をからくも逃れ、村のHéritier家に匿われて戦後に母親と再会できた。息子3人を失ったFortunéeはその後、Beate KlarsfeldとともにKlaus Barbieを追跡し、法廷に引きずり出すことに成功した。同様の境遇にあったIta Haunbrennerとともに「イジューの母」と称えられる。以下は1983年のKlaus Barbie裁判での証言。

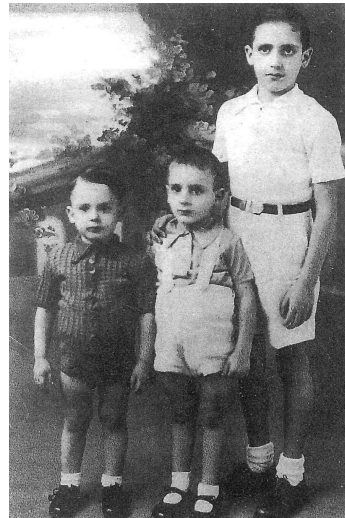


図7 Jean-Claude, Richard, Jacques BENGUIGUI

Jacquesは本当にまわりを明るくしてくれる子でした。1942年以前、アルジェリアに住んでいた頃、あの子はボーイスカウトをしていました。歩くときはいつも先頭で、まさにリーダーでした。歌ときたらそれはもう見事で、快活さが皆に伝わっていくようでした。弟のRichardはなんというお道化だったことでしょう！この2人の子供たちはまるでお笑いのコンテストにいつも参加しているようなものでした。わたしたちがマルセイユに着いたときにJean-Claudeは、つまりBenjaminはまだ4歳でした。でも家の男たちは皆あの子が体操をするのを見物するために集まってきたものです。体操でもつり棒でも回転でも、ほんとうに体のやわらかい子でした……

ジャーナリストのAntoine Spireはこの裁判に関心をもつすべての人々にとって彼女は「強烈なイメージ」となったと述べている。

6) Marcel BORENSZTAJN. (pp. 518-519.)

写真中央。両肘を張って学業一等賞のきれいな本を腕に抱えている。10歳。パリ生。パリ10区Buisson-St-Louis通り15番地居住。母親とはPithiviers (Loiret県)の収容所で引き離された。母親は第14移送列車(1942年8月3日)で移送され、Marcelは1942年8月26日の第24移



図8 Marcel BORENSZTAJN



送列車で後を追った。以下はMarcelがPithiviersから父親に宛てて書いた手紙。

Pithiviersにて 1942年 8 月19日

パパへ

今日、3時か4時ごろ、憲兵がバラックにやってきてぼくを呼びだしました。ぼくの姓と名を読み上げて。ついてくるように言われたので収容所から出ていくと、彼はぼくを憲兵隊の分署に入れました。当直の将校がぼくに小包をわたしてくれましたが、それには消印もなければ収容所の宛先も書いてありません。憲兵隊からの帰り、家族のだれかがPithiviersにいるはずだ、それはパパにちがいない、ぼくの名前の筆跡はパパのだから、と考えました。小包はとてもおいしかったです。今朝配給された2日分の配給食のパンはお昼に食べてしまったばかりでしたから。ハーモニカは送らないでください。ついさっき、まだ一時間もたっていませんがひとつ買ったところです。ママの便りはなにもありません。(判読不能)きっと子供の移送があるはずです。ぼくも行くことになるでしょう。パパをきつく抱きしめてこの手紙を終わりにします。

パパの息子 Marcel

# 7) Maurice GERENSTEIN, Liliane GERENSTEIN. (pp. 652-653.)

Mauriceは1931年1月3日、パリ生。Lilianeは1933年1月13日、ニース生。Izieuには2人とも1943年12月1日に到着。Izieuの44人の子供たちのうちの2人。父親のChapseeは1901年8月23日、Odessa (Ukraine) 生。母親のChendla (旧姓Entine) は1903年1月10日、同じくOdessa (Ukraine) 生。最終居住地はHaute-Savoie県ÉvianのBains通り9番地で、逮捕されたのは同県のAnnemasse。両親は1943年11月20日の第62移送列車でDrancyよりアウシュヴィッツへ。音楽家の父親はアウシュヴィッツの囚人オーケストラではトランペットを演奏していた。収容所を生き延び、アメリカ合衆国に移住。Lilianeが書いたこの胸を括られるような手紙は1944年4月6日の一斉逮捕の後、Izieuで発見されたものである。神に宛ててこの手紙を書いてからわずか数日後に、彼女は兄とともに第71移送列車で移送され(1944年4月13日、Drancyよりアウシュヴィッツへ)、仲間の子供たちと一緒に殺害された。

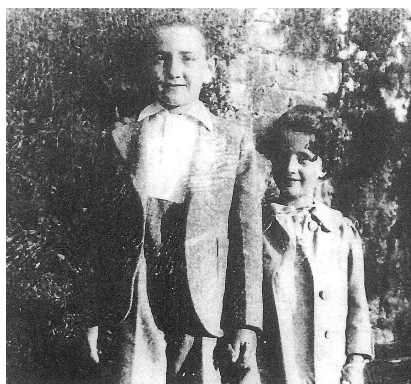


図9 Maurice et Liliane GERENSTEIN

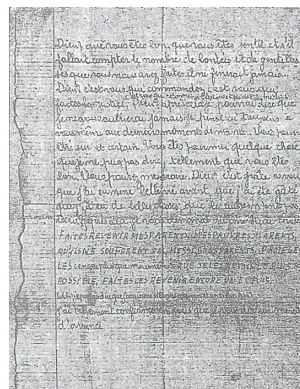


図10 Lilianeの手紙

神さま、あなたはなんて善良なのでしょう。なんておやさしいなのでしょう。あなたがわたしたちにほどこしてくださった善良さとやさしさを数えなければならないとしたら、けっして数え終わることはありません。神さま、あなたは命令をくださる方、あなたは正義、善人に酬い悪人を罰する方です。神さま、わたしはけっしてあなたのことを忘れないといえます。いつもあなたのことを思います。たとえ命の最期のときでさえ。どうかわたしのことを信じてください。あなたはわたしにとって口ではいえないなにかです。そんなにもあなたは善良なのです。どうかわたしのことを信じてください。神さま、あなたのおかげでこれまですばらしい人生を送ってきました。わたしは甘やかされて育ち、ほかの子供たちはもっていないすてきなものをもらいました。神さま、ひとつだけお願いがあります。わたしの両親をかえしてください。わたしのかわいそうな両親を。もう一度、なるべくはやく会えるようにどうか両親をお守りください(わたし以上に)。もう一度だけ両親に会わせてください。ああ、わたしのママはあんなにもやさしく、そしてパパもあんなにやさしかったのに。あなたのことをこんなにも信じていますから、あらかじめお礼をいわせてもらいますね。(強調は原文)

MauriceはMax Balsamとともに1944年4月6日にLéon Reifmanが施設に連れ帰った2人の子供のひとりであった。Bellayの学校の生徒たちは復活祭のヴァカンス中であった。施設で働いていた医学生Léon Reifmanは一斉逮捕を免れた唯一の大人である。施設の医師でLéonに急を告げて逃がしたSarah Levan-Reifmanは姉であり、その息子Claude Levan-Reifmanは甥にあたる。LéonとSarahの両親であるMoiseとEvaも含めて、Léon以外の一族はすべて第71移送列車でアウシュヴィッツへ送られ、殺害された。

8) Rachel SAMEROFFの妹Fernande. (pp. 794-795.)

わたしの名前はRachel SAMEROFFといいます。旧姓はKOKOTEKです。両親の名前は父がWolf KOKOTEK、母がBronia KOKOTEKです。1931年12月27日、St-Antoine病院で生まれました。妹のFernandeは1938年生まれです。父は高級家具職人でした。パリ12区のBeccaria通り19番地に住んでいました。

1942年の末、猩紅熱にかかってTrousseau病院に入院しました。毎日母が見舞いに来てくれましたが遠くからしか母の姿は見られませんでした。隔離中でしたから。

ある日、同じ階のお隣さんのRegistel夫人が母の代わりに来てくれました。母が脚を悪くしたのでわたしが治って退院するときには彼女が(つまりRegistel夫人が)迎えに来てくれるとの話でした。

退院の日が来て、Registel夫人の家のご厄介になりました。うちのアパートマン



図11 Fernande KOKOTEK

のドアが封印されていることに気づいたのはそのときでした。

Registel夫人の家で見つかったものといえば、わたしのお人形、ローラースケートの靴、何着かの服だけです。

そのときにRegistel夫人がいうには、わたしの父と母と妹は大急ぎで逃げなければならず、いまだここにいるかは夫人にもわからないということでした。当時わたしはまだ10歳でしたが、そんな年齢でもドイツ人たちがユダヤ人を迫害していたことは知っていました。わたしだって以前から黄色い星を付けていましたから。わたしはいつもいつも聞き分けのいい子、ではありませんでしたから、両親がわたしをおいて出ていったのはわたしに罰を与えるためだ、などと思ったりしました。

Registel夫人はわたしをEpinay sous SénartのSainte-Hélène寄宿学校に匿ってくれました。そこには1943年の夏までいました。洗礼を受け、聖体拝領と堅信礼を済ませました。自分が完全に見捨てられたような気持ちになったのはその頃です。手紙も来なければ訪ねてくる人もいないのですから。

理由がよくわからないのですが、わたしは寄宿学校を出なければなりませんでした。Registel夫人が別の避難所をみつけてくれました。Voinotさんのお宅です。Yonne県のAvrollesでパン屋さんをしていました。戦争が終わるまでそこにいました。その頃Registel夫人に手紙を書いて、こうお願いしました。両親がもどってきたら、わたしの居場所を教えてやってください、なるべく早くわたしを迎えに来られるように。

Registel夫人から返事が届きました。そこではじめてわたしは、両親と妹は1942年7月16日の一斉逮捕でつかまったことを知ったのです\*。フランス警察がつかまえて来たのです。資料によれば、両親と妹はアウシュヴィッツで亡くなりました。

その後、ユダヤ人団体の民生委員が迎えにやってきて、Cailly sur Eureにあるユダヤ人児童の施設に引き取られました。パレスチナに移住するつもりでしたが、奇跡的にも1946年に父方の親戚がアメリカ合衆国にいたことがわかりました。1947年にわたしはフランスを去ったのです。

あのおぞましい時代がいまのわたしに遺したものといえば、それはおそろしい悪夢、わたしから去ろうとしない悪夢です。いつも同じ悪夢なのです。だれかに追われる、隠れる、両親をみつける、でもわたしだということが分かってもらえない。

\* 父親は第13移送列車で、母親は第16移送列車で、そして4歳の妹のFernandeは両親から引き離されて1942年8月28日の第25移送列車で移送された。（\*は原注）

## 9) Léo et Albert SCHREIBER. (pp. 1040-1941.)

Léoは1931年8月18日フランクフルト生。Albertは1938年3月27日パリ生。パリでの住所は、18区Louis Bonnet通り14番地。Léoが生き延びた父親のJulesに、起こったことを語る。

Pithiviers, 1942年 8月11日

お父さん

お別れしてからぼくたちになにが起こったのかをお話しします。まず警官たちがぼくたちのところにやってきて、Parmentierの小学校に連れて行きました。そこでバスが来るのを待たされました。バスはぼくたちを冬季競輪場Vélodrome d'Hiverに運び、ぼくたちはそこで5日を過ごしました。それからぼくたちはオーステルリッツ駅に連れて行かれて、家畜(馬)用の貨車に積みこまれました。列車はPithiviers (Loiret県)に向かい、そこでぼくたちはわらのうえに寝かされました。この収容所で2, 3週間過ごしたころ、やっかいなことが起こりました。どこなのかぼくたちにはわからない場所ですが、そこに送るためということで、人が選ばれはじめたのです。わかっていることといえば、選ばれた人たちには4日分の食糧がわたされるということだけです。3番目の集団でママも出発していきました。出発する人たちはそのまえに持ちものを調べられます。ママは財布にあった20フランをわたしました。残りのお金は全部そのまえにぼくにんでいたのです。3,110フランになります。だからママはお金をぜんぜん持たないで出発したのです。ダイヤの指輪は口の中に隠していました。だからとりあげられないで持っていくことができたのです。結婚指輪はとられずにすみしました。あの6日の木曜日には、結婚指輪はとりあげられなかったのです。

話を続けます。ママは便せんを身につけていましたがそれはとりあげられてしまいました。手紙を書く権利はないということです。Albertはまだあんなに小さいのでママから引きはなされたときには泣きました。中庭の地面にころがって泣いていました。とても悲しそうに……



図12 Léo et Albert SCHREIBER

Léoは8月20日、Drancyから父親にもう一枚ハガキを出すことができた。

いままで手紙を書くことができませんでした。ぼくたちはPithiviersからDrancyに送られたからです。ママは、お父さんも知ってのとおり、Pithiviersから移送されました。どこに送られたかはわかりません。ぼくはここDrancyで誕生日を迎えました。ここへ来るのにぼくたちは家畜用の貨物列車で運ばれました。車輻のなかにはぎゅうぎゅう詰めでした。

母親のMendlaは第16移送列車(1942年8月7日)で移送されていた。LéoとAlbertはちょうどその2週間後の1942年8月21日の第22移送列車で母親の後を追うことになった。





図13 奇跡的にも生還を果たしたGeorges Horanのスケッチ。1945年作。ドランシー収容所最寄りのBourget-Drancy駅（Seine-Saint-Denis県）に到着した子供たち。取り囲むのはフランス警察。© Mémorial de la Shoah/CDJC.



図14 同じくGeorges Horanのスケッチより。フランス警察によって強制収容所に移送される子供たち（部分）。(Klarsfeld, p. 73.)

### 3 マリーヌ・ル・ペンとクラルスフェルト～むすび

いわゆる「極右」とは人種主義を明示的に標榜もしくは非明示的に内包するがゆえに単に「右翼」ではなく「極右」と称されるわけだが、そうだとすると、「国民戦線」(Front National)<sup>(4)</sup> はたとえ父から娘へと党首が変わっても、そして党名が変わっても、その「極右」としての体質は旧態のままである。前党首Jean-Marie Le Penはいわば筋金入りの極右であり、絶滅収容所におけるユダヤ人虐殺を軽視する発言をするなど、反ユダヤの（そしてもちろん反イスラムの）主張を隠すことはなかった。そして2011年に父に代わって党首の座についた娘のMarine Le Penは、いわばソフト路線に転換して極右色を薄めようとしているが、2017年4月10日の大統領選の演説において、占領時代のユダヤ人大量逮捕に関しては「フランスに責任はない」と発言して物議を醸した。

2017年4月10日付AFPによると、ニュース専門テレビのLCIの番組において彼女は大略以下のように述べたとされる。すなわち、1942年7月のいわゆるヴェル・ディヴ事件については「フランスに責任があるとは思わない」、そして「もし責任があるとするれば、当時、権力を握っていた人々だ。フランスではない」と主張した。ジャック・シラク元大統領が



1995年7月16日の記念式典にさいして初めてフランス政府の責任を認めて以来、歴代の大統領はこの立場を踏襲しているが、ル・ペン党首はこれを真っ向から否定したわけである。ここで彼女がいう「当時、権力を握っていた人々」というのはもちろんヴィシー政府のことを指していて、たしかにヴィシーの「フランス国État Français」は共和国フランスとは無縁の対独協力組織に過ぎず、占領期間においてもフランス共和国は栄光あるレジスタンスのなかに存続していた、というのが戦後フランスの大方の国民意識であった。したがってヴィシーのおこなったユダヤ人狩りをはじめとするもろもろの汚れ仕事はあくまでも対独協力派の責任であってフランス共和国はいっさい関与するものではないことになる。

しかしながら、たとえばレジスタンス活動で知られるミッテラン元大統領自身もある時期まではヴィシーの有能なメンバーであったことからわかるように、事実はそう単純ではない。占領軍に果敢に抵抗した人もいればヴェルコールの作品で描かれたように沈黙のうちに反ナチスの意志を貫いた人ももちろん少なからずいたであろうが、いわゆる「見て見ぬふり」というのが大半のフランス人の実情であったことは、たとえばMarcel Ophülsの長篇記録映画*Le Chagrin et la Pitié* (1969) (『悲しみと憐れみ』日本未公開)に明らかである。シラク元大統領の謝罪は——情理を尽くした名演説ではあるが——遅すぎるほどであった。マリヌ・ル・ペン党首の発言はこうしたいきさつをまったく無視するもので、当然のことながら対立候補であった中道のエマニュエル・マクロン（現大統領）をはじめとして各方面から激しい批判を招いた。

ル・ペン党首の発言は反ユダヤ感情に（ひいては反イスラム感情に）媚びることが目的であったことは明白であるが、さすがに逆風に耐えかねてか、同じくAFPによれば彼女はさっそく次のように釈明したとされる。すなわち、「(ナチス) 占領下のフランス共和国政府は、英ロンドンを拠点としていたというのが私の認識だ」、「(当時の) ヴィシー政権はフランスではない」と。だが、一見ドゴール風のこの釈明にもかかわらず、彼女を徹底的に追及したのが*Les Fils et les Filles des déportés juifs de France*の代表者セルジュ・クラルスフェルトおよび息子のArno（同団体の弁護士）であった。父子は*Le Monde*紙（2017年4月11日付）に「ヴェル・ディヴ事件はフランス国の打ち消すことのできない犯罪である」と題する記事を寄稿し、ル・ペン党首に反論した。その骨子は以下のとおりである<sup>(5)</sup>。

まずクラルスフェルトは、ユダヤ人狩りにフランスの官憲が関与しなかった（もしくはたとえ関与があったとしてもそれは占領軍に強制されてのことであった）というこの種の主張が国民戦線にはおなじみのもので、その点では前党首の時代からまったく変わっていないことを、「彼女が依然としてその父親と臍の緒でつながっている」という表現で皮肉る。ただしここでもう少し深読みするなら、クラルスフェルトの批判はル・ペン父娘のみならず、同じ論理でヴィシーの責任を積極的に解除しようとする勢力、あるいはそれどころか戦後70年を経過してヴィシーのことなどすっかり忘却しつつある一般フランス人にも向けられているのではないか。ヴィシー＝対独協力＝悪、一般国民＝レジスタンス＝正義、という単純で都合の良い立場は極右のみならずある時期までのフランスのほとんど全国民的な共通見解であったことは多くの人々が指摘するところであり、渡辺和行の研究で明らかのように（とりわけ『ホロコーストのフランス』第一章）、対独協力がヴィシーだけの行為ではないことをもっとも初期の時点で指摘したのがRobert O. Paxtonなど外国人

であったことはこの間の事情を雄弁に語るものであろう。

つぎにクラルスフェルトは、ヴィシーの指導者たち、すなわちペタン元帥やラヴァルはすでに第三共和政下の権威ある軍人・政治家であり、だからこそフランスは占領地域も非占領地域も行政や司法など全権力機構がその指令に服したことを指摘する。ミッテラン元大統領をはじめ、戦後の有力な政治家や官僚たちの大半がなんらかの形でヴィシーにかかわっていたことも今日では明らかにされていて、そのことをル・ペン党首が無視していることを追及する。ドイツの占領行政はじつのところヴィシーの（とりわけ警察と憲兵隊の）協力なしでは成り立たず、したがってクラルスフェルトは第三として、もしフランスの名誉があるとすればそれは、ユダヤ人の国籍を問わずナチス親衛隊の逮捕要求を峻拒することにあつたはずだとベニエール牧師を引用しつつ主張するのである<sup>(6)</sup>。

この反論記事において折りに触れてクラルスフェルトが言及するのは親から引き離されて移送され、殺害されたユダヤ人の子供たちのことだ。この一斉逮捕がフランスと人類にとって「悲しみと恥辱」の記憶として消し難いものとなったのは、そして「人類に対する犯罪」となったのは、まさにこれら無垢の子供たちの犠牲のゆえである。クラルスフェルトの目には、この極右の党首の向こう側に犠牲となった子供たちの顔——「微笑みをたたえた、人を信じきった多くの顔」——が見えていたにちがいない。グローバリズムのメリットを最大限に享受する人々がいる一方で貧困や格差の度合いはいよいよ深刻化し、加えて近年の政情不安による移民・難民の激増は容易ならぬ宗教的・文化的軋轢を惹き起こしつつある<sup>(7)</sup>。これらのことと頻発するテロとは無関係であるはずがない。戦争と虐殺の20世紀を嫌というほど経験したはずの日米欧いずれの地域においても、程度に差こそあれ憎悪に毒された差別的行為——というより差別そのもの——はなおとどまるところを知らない。政治経済や文化においてリーダーとなるはずの人々が平然とそのような言動に及ぶこともあり、われわれは嫌でも1930年代から大戦時にかけてのことを連想せざるを得ない。こうした時代状況にあるとき、無条件の愛情と保護をもっとも必要としていたはずのあれらの子供たちが抵抗するすべもなく憎しみと無関心のなかで無残に殺戮されていったという事実、われわれは繰り返したち帰る必要がある。

## 注

1. ラウル・ヒルバーグによれば、1941年4月6日にヴィシー政府のユダヤ人問題委員Xavier Vallatは、「この数年間にフランスに流れ込んできた」東方ユダヤ人は「十中八、九、再び追い出されるだろう」と語った。事実、1936年以後フランスに入国した外国籍または無国籍のユダヤ人はもっとも政府の保護を受けることが薄かった（pp. 473—475）。つまり見捨てられた、というよりも人身御供として率先して差し出されたのである。
2. 彼は日本語版への序文のなかで、本書へのさまざまな批評のなかでつぎの言葉に深く感銘を受けたと語っている。「もはや名前も分からなくなった人々を死者の世界に探しに行くこと、文学とはこれにつきのものかもしれない」（p. 3.）
3. モディアノがクラルスフェルトのこの仕事にどれほどの衝撃を受けたかは、モディアノの前掲書の訳者あとがきの解説に詳しい。また松岡智子の論文にも同じく詳述されている。
4. 2018年6月より党名を「国民連合」（Rassemblement National）に変更。
5. 以下、ル・モンド紙より批判記事の全文を引用しておく。

ヴェル・ディヴの一斉逮捕についてその深い考えを表明することで、マリーヌ・ル・ペンには彼女が依然としてその父親と臍の緒でつながっていることを明白に示した。彼女もその父親も、あの一斉逮捕にフランス警察が関与していたことを否定するのである。逮捕されたおよそ13,000人のユダヤ人たちがフランス警察の手によってドイツ人に引き渡されたことを、彼女も父親と同じく否定するのである。あの13,000人のうち4,000人はその大半がフランス生まれの子供たちで、子供たちにフランス国籍を与えたのは外国人の、そして無国籍とみなされた親たちだったのだ。

マリーヌ・ル・ペンにいわせるなら、ヴィシーに腰を据えたフランス国の政府を指導するペタンやラヴァルといった決定権をもつ連中だけがあの大掛かりな逮捕に責任があるのだそうだ。フランス警察は自分たちの考えであの一斉逮捕を実施したというのに。

マリーヌ・ル・ペンはわかっていない。フィリップ・ペタンが栄光に包まれたフランス元帥であり、ピエール・ラヴァルが第三共和政において何度も首相を務めた政治家であることを。彼らのそういう権威があればこそ、県の全行政機構と警察力が1942年7月のパリおよび全占領地帯における外国籍ユダヤ人の逮捕に突き進んだのである。そして逮捕は8月と9月には非占領地帯にまで及んだのだが、自由地帯と呼ばれたこの地帯ではまさにヴィシー体制がその主権を行使していたのだ。そして、あらゆる法人がユダヤ人を排除する法令を受け入れ、ユダヤ人の財産をアーリヤ化し横領したことを、行政がユダヤ人を登録し強制収容したことを忘れてはならない。

1942年の夏にペタン＝ラヴァルの政府が自分のものとして所有していたのは、その艦隊であり、その帝国であり、第三帝国の軍需産業を最大限に稼働させるだけのその経済であり、フランスの秩序とドイツの占領部隊の安全を保障するその警察および憲兵隊であった。

フランス国籍のユダヤ人を、あらゆる国籍のユダヤ人を、そしてフランスの名譽を守るもっとも有効な方法はなにかといえば、それはユダヤ人を逮捕するのにどうしても必要なフランス警察の協力を親衛隊から要求されても拒絶することであつたろう。ユダヤ人の国籍など問題にならない。そういう決断をしていれば、ベニエール牧師\*がフランスのためにペタンに予言していたことは避けられたはずなのである。彼の予言とはこうだ。「その重みが計り知れないほどの道徳の敗北」。

ヴェル・ディヴ事件の犠牲になった何千もの幼い子供たちは、ほとんど全員が親から引き離された。親は子供よりもさきに移送されたからだ。そしてそのあと子供たちはおそるべき環境のなかを死へと送り出されたのである。

ヴェル・ディヴ事件は消すことのできない悲しみと恥辱の歴史の一ページだ。それはヒトラー・ドイツの民族絶滅の意志と固く結びついたフランス国政府が犯した、人類に対する犯罪の一ページなのである。

立場を問わずあらゆる善良な人々のおかげで、フランスのユダヤ人の4分の3の命が救われた。240,000人が生き延びたのだ。

「最終解決」にフランスが関与していたという事実が浮かび上がり、また決定的なものとなるには時間が掛かった。かくして20世紀の終わりになってようやくジャック・シラクは冬季競輪場の跡地でこう宣言したのである。「あの日、フランスは取り返しのできないことをしました」と。そして2012年7月にフランソワ・オランドは同じ場所での問題について必要欠くべからざる国民的一致を表明したのだ。「この犯罪はフランスにおいて、フランスによってなされた」と。

あの時代は、ド・ゴール将軍の反逆するフランスとペタン元帥の服従するフランスとが戦いをくりひろげた内戦の時代であった。それはまた、1942年7月17日から9月30日にかけての11週間にわたって、フランス警察が逮捕した33,000人のユダヤ人がドイツによって移送された時代なのである。そしてこの動きは、もしヴィシー体制を支えたカトリック教会の高位聖職者たちとプロテスタント教会の指導者たちがこれらの非人間的なやり方に抗議の声をあげなかったとしたら、そのまま続いていたことであろう。

早くもその頃から、キリスト教的かつ共和國的な諸価値に勇気づけられた善良な人々が、立場の違いをこえて、フランスのユダヤ人の4分の3の命を守ることに手を差しのべたのである。かくして240,000人のユダヤ人が生き延びた。至るところでユダヤ人が追放され殺されていた当時のヨーロッパにあって、これは真に例外的なことであった。

ユダヤ人に対してフランス国がおこなった不正が人々の心に掻きたてるものといえば、それ

は恥辱と怨恨のみである。しかしフランス人は勇気をもってフランス国に反対し、全体として「正義」の名に値することができたのだ。

\* 訳者補足。Pasteur Marc Boegner 1881–1970。フランス・プロテスタント教会の牧師で占領中はヴィシーの国民評議会のメンバーとしてユダヤ人を守る活動をおこなった。1942年8月20日、ヴェル・ディヴの一斉逮捕のあと、彼はペタン元帥に書簡を送り、抑留されていた外国籍ユダヤ人のドイツ移送を非難している。「真相はこうです。すなわち政治的および宗教的理由でフランスに避難してきた男女が、つい最近ドイツに移送されたということです。彼らの多くは、ドイツで自分たちを待っているおそろべき運命をあらかじめ知っています。(略) 元帥閣下、わたしはさらに付け加えねばなりません。これら不幸な外国人たちの移送が多くの場所で非人間的なやりかたでおこなわれたということを。あのようなやりかたにはもっとも冷酷な人ですらその良心を憤激させられ、そして目撃者は涙を流さずにはいられませんでした」。

6. ユダヤ人狩りについてラヴァル自身は戦後になってつぎのように釈明している。「私は、自分の第一の義務はユダヤ系同国人に向けられていること、彼らの利益を犠牲にはできないことを考えて、できる限りのことをやった。この場合、庇護の権利は考慮されなかった。ドイツ軍に占領された国で、ほかにどのような方法があったというのか。ゲシュタポが猛威をふるっている国で、どうすればユダヤ人を十分に保護できたというのか」(Pierre Laval, *Diary*, New York, 1948, pp. 97-99, cité par Hilberg, p. 484)。同じくドイツに占領された国でもたとえばデンマークのような例もあることを当時のラヴァルは知っていたのだろうか。また子供を親から引き離すことについては、ヒルバーグの記述によれば (p. 484)、フランス警察は子供を大人と一緒に輸送するよう繰り返しドイツ当局に要望したとある。これが人道的配慮なのか、それとも管理上の要請なのかは不明である。ただしラヴァルに関して言えば、同じくヒルバーグによると (p. 485)、「非占領地域からも外国籍ユダヤ人を引き渡す用意があると宣言し、16歳以下の子どもたちも「一緒に連れて行く」ように提案した。ドイツ人は元気づけられた」とあるので、そこに人道意識を見出すことは困難であろう。
7. グローバリズムによる困窮化が極右への共感を醸成するという一面はたしかにある。しかしたとえばそうであっても、極右の人種主義は到底許容できるものではない。人種主義はつねに、そして本質的に優生思想と結びついており、ひとたびそうした考え方が社会に根付いてしまえば障害者などマイノリティへの迫害はほとんど必然のものとなすからだ。

## Références

- Biscarat, Pierre-Jérôme, *Izieu, des enfants dans la Shoah*, Fayard, 2014
- Dawidowicz, Lucy S., *The War Against The Jews, 1933-1945*, New York, Holt, Rinehart & Winston, 1975. (ルーシー・S・ダビドビッチ著、大谷堅志郎訳『ユダヤ人はなぜ殺されたか』、明石書店、1999年。)
- Defrasne, Jean, *L'Occupation Allemande en France*, Collection Que sais-je?, PUF, 1982. (ジャン・デフラーヌ著、長谷川公昭訳『ドイツ軍占領下のフランス』、文庫クセジュ、白水社、1988年。)
- Defrasne, Jean, *Histoire de La Collaboration*, Collection Que sais-je?, PUF, 1982. (ジャン・ドフラーヌ著、大久保敏彦・松本真一郎訳『対独協力の歴史』、文庫クセジュ、白水社、1990年。)
- Hilberg, Raoul, *The Destruction of the European Jews*, revised and updated edition, Yale University Press, 1997. (ラウル・ヒルバーグ著、望田幸男、原田一美、井上茂子訳『ヨーロッパ・ユダヤ人の絶滅』、柏書房、1997年。)
- Klarsfeld, Serge, *Le mémorial des enfants juifs déportés de France, 4e volume, La Shoah en France*, Fayard, 2001.
- Modiano, Patrick, *Dora Bruder*, Gallimard, 1997. (パトリック・モディアノ著、白井成雄訳『1941年。パリの尋ね人』、作品社、1998年。)
- Ophuls, Marcel, *Le Chagrin et la Pitié*, Gaumont, 1969 (distribué en DVD 2001).
- Paxton, O. Robert, *Vichy France : old guard and new order, 1940-1944*, New York, Knopf, 1972. (ロバート・O・パクストン著、渡辺和行訳『ヴィシー時代のフランス 対独協力と国民革命1940–1944』、パルマケイア叢書、柏書房、2004年。)

松岡智子「セルジュ・クラルスフェルト作『フランスのショア』をめぐって」, 倉敷芸術科学大学紀要, 2017年。

宮川裕章, 『フランス現代史隠された記憶』, ちくま新書, 筑摩書房, 2017年。

渡辺和行, 『ナチ占領下のフランス』, 講談社, 1994年。

渡辺和行, 『ホロコーストのフランス 歴史と記憶』, 人文書院, 1998。

*Le Monde*, le 11 avril, 2017. (クラルスフェルトによるル・ペン批判)

<http://www.ajpn.org/personne-Fortunee-Benguigui-5821.html> (Benguigui兄弟)

<http://www.memorializieu.eu/souscrivez-pour-la-maison-dizieu> (イジュー記念館)

[https://fr.wikipedia.org/wiki/Enfants\\_d%27Izieu](https://fr.wikipedia.org/wiki/Enfants_d%27Izieu) (イジューの子供たち)

<https://www.afpbb.com/articles/-/3124559> (AFPル・ペン党首の発言)

[https://fr.wikipedia.org/wiki/Marc\\_Boegner#cite\\_note-10](https://fr.wikipedia.org/wiki/Marc_Boegner#cite_note-10) (ベニエール牧師)

## Pour entendre la voix d'enfants de Drancy

Ryoichi Izumi

Dans cet article, nous avons pour but de : 1° présenter quelques lettres que des enfants juifs ont écrites à leurs parents avant d'être déportés et assassinés, y compris des témoignages qui se portent sur ce sujet ; 2° constater la dette de mémoire de la Shoah, que la France d'après guerre doit payer pour établir son identité nationale ; 3° trouver une occasion de rompre avec la haine et la violence en entendant la voix basse de ces enfants abandonnés dans le silence, là où augmentent des gens qui éprouvent de la sympathie pour la puissance politique de l'extrême-droite.